

# 高亨

Hitati Umeaoka Hospital

Keiaikai of Medical corporation

Director Masaki Okada

〒316-0012 2409-3 Ookubo-cyou

Hitati-shi IBARAKI-KEN

Tel:0294-34-2103

http://www.umeaoka.jp

MAYUMI

December 2013 NO, 71



 Since 1996

## IT委員会

みなさん、知っていましたか？

この院内報『まゆみ』は平成23年よりIT委員会が発行しています。

また、今年6月に13刊目を発行した『年報』もIT委員会のお仕事です。

さらに、病院パンフレットも作成しています。そしてここ1~2年、力を入れているのがホームページです。

まだまだ発展途上ではありますが、患者様やご家族のみなさまにとって、当院を知って頂く第一歩目となるよう、わかりやすいホームページ作りを目指しています。さらには関係各所や医療関係者等を対象としての情報を発信して行くことで、より当院の評価を上げることが出来るものと思いで、委員一同通常業務に負われながらも更新作業等を頑張っています。

以上、簡単ではありますが、広報的な役割を任されているIT委員会の紹介でした。

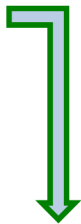
PS…本来のITを駆使した業務改善への取り組みはまだまだでして、今後の課題とさせていただきます。

当院ホームページです。

当院の顔である、医事課や

医療相談室のみなさんの

笑顔がすてきです。



## ～ 目次 ～

「IT委員会」.....	P1	「現在の取り組みと課題、そして更なる試み」	
「生き生きと働ける職場をつくるために」院内学会委員会.....	P2	医療相談室 高林朋史.....	P4
「梅ヶ丘自然博物館」.....	P2	「シリーズ 意外な趣味」心理 郡司幸生.....	P4
「現在の取り組み」D棟 吉田恭子.....	P3	「備えあれば嬉しいな」総務 大窪敬美.....	P5
「これからの課題」C棟 川崎正崇.....	P3	「フットサル活動」作業療法 宇佐美隆大.....	P5
「すてきだね、やまゆり」.....	P3	「編集後記」.....	P5



## 生き生きと働ける職場をつくるために ～モチベーションを高めるために医療人に求められること～

### 院内学会委員会

院内学会委員会は、全職員が日立梅ヶ丘病院の職員としての誇りを持つこと、業務に関する自己の役割と責任を遂行していくことができるスキルアップを図ることの二つを目的としている。また、当委員会において、多くの医療に関する知識、最新情報を共有し、意見交換を通して学び合うことができる支援体制を築いている。

院内学会は、平成 18 年の第 1 回から今年で 8 回を迎え各部署の研究内容が充実してきた。この研鑽の積み重ねによって、平成 24 年には院外の研究発表会に初めて参加する機会を得ることができた。今後も現状に満足することなく、課題を明確にするため継続していくことが大切であるとする。

院内研修会・勉強会を開催する上で、参加状況等から鑑みると多くの職員は受け身の姿勢であると考えられる。人は、意識的であれ、無意識的であれ、目標に向かって生きているといわれている。職員自らが、「自己の将来像」へ向かって変わっていくという意識が重要であり、また、院内研修会・勉強会参加の場が、職員のやる気を引き出す一助でありたいと考える。

われわれは、医療人として自分自身の職業観、医療職人生について目標設定をし、それを実現するためのキャリアデザインを描くことが大切であり、また各自のこれまでの経験やスキルを踏まえた上で、「自己の将来像」を具体的に考えてみてはどうだろうか。こうすることによって、自らの能力を活かし、自らの可能性を高めるために、業務に対してどのような姿勢で取り組むべきかの示唆が得られると思われる。

今後の院内研修会・勉強会及び院内学会を通して、職員のモチベーションを理解し、個人や部署の成果を職員皆で共有し合えるそのような組織風土づくりが必要と考える。

院内学会委員会では、院内研修会・勉強会の参加者 1 人 1 人に、日立梅ヶ丘病院の職員としての誇りを持つことと、業務に関する自己の役割と責任を遂行していくことができるスキルアップを図ることができるよう、支援していきたいと考える。



## 梅ヶ丘自然博物館



## ～現在の取り組み～

D棟 吉田 恭子

私は、4月の異動で7年ぶりにD棟に移ってきました。そこで驚いたことが、まず、以前に比べて異臭がなくなったこと。それは、昨年の院内学会でも発表されたように、業務の改善を図り、より吸収率の高いオムツを取り入れたことで臭いの改善につながったように思います。そして、スタッフの協調性1人ひとりが己の業務を把握し、常に患者様のために動いているということ。気がついた時に、患者様の要望に沿った看護・介護を提供できていることはとても大切であり、見習うべきだと改めて実感させられました。

病棟の目標にも掲げられているように、病棟の機能や回転率を向上させ、病棟業務がより質の高いものとなるように努力している日々であります。業務の効率化、向上の一方で、患者様への対応・ケアの質の向上も責務であり、他の施設の環境特性を把握することを目的に、7月より施設見学をしています。認知症疾患医療センター、医療福祉相談室と連携し、Dr.やスタッフ全員を対象として、4～5名ずつに分けて特別養護老人ホーム MAO、デイケアみなと、グループホーム MAO を見学してきました。D棟と施設の違いや患者層、どのような人が対象で入所できるのか等を見学し、退院につなげていく方向で取り組んでいます。

また、OT が講師となって病棟勉強会を開き、認知症のタイプ別の適切な対応、ケアを学んでいます。更に、患者様についてよりよい看護・介護を提供できるよう日頃からミニカンファを開き、スタッフ一同知恵を絞っているところです。

認知症の患者様はなかなか手強く、異食や放尿・弄便等、他では見られないようなアクションを起こしてくれるのです。日勤でも夜勤でもそのようなことが立て続けに起こり、一段落したところでまた・・・の繰り返しで後始末に追われ、いつコミュニケーションをとるの！？という時もしばしばですが、私たちはプロであり、患者様を誰よりも間近で関わっている以上、個々に合った看護・介護をしたいものです。そのためにも視野を病院の外に広げ、まだまだ補足しなければならない知識を詰め込んでいきたいと思っています。そして患者様だけではなく、その家族にも手を差し延べられるような人になれば最高ですね。

## ～これからの課題～

C棟 川崎 正崇

C棟はご存知の通り新棟移転時には、旧B棟のように慢性期の統合失調症の患者様が多く、在院日数こそ多ものの、日常生活動作もほぼ自立されている患者様がほとんどであった。

本年4月以降、病院全体の入院患者様の増加に伴い今までのC棟には入院されていなかった患者様が増加してきている。この結果、4月までは40名ほどの入院患者様であった入院患者様が、現在は50名ほど常時入院されている。また、入院患者様の増加とともに、それまで患者様と密に関わっていた時間が以前と比較して減少するという事態になっている。そして、現在は認知症の患者様もあり、認知機能の低下、日常生活動作もままならない患者様が増加している現状がある。本来そのような患者様を受け入れる病棟ではなく、病棟の構造上もそのような患者様を受け入れる体制ではなかった。そのため認知症患者様に対する看護を十分に提供することが出来なかった。

以上の点を踏まえ、病棟ではこうした現状を改善することが急務となっている。そのため、スタッフには認知症患者様に対する知識の習得、看護を行うことが出来るように各個人のスキルアップを行うようにしている。

また、先にも述べたように元来C棟に入院・転入する患者様は金銭管理や洗濯などが自分で行うことができる患者様に限られていた。しかしながら、他の病棟の事情もあり、そうしたレベルに達していない患者様も入院・転入するようになってきている。そのため、患者様のセルフケア能力を向上させるような能力が職員1人1人に求められており、この部分に関して職員1人1人のスキルアップが必要である。そして、こうした努力を各個人が行うことで、今までとは異なった病棟になる可能性も秘めており、予てから計画されているストレスケア病棟への道筋が見えてくるのではないだろうか。



すてきだね  
やまゆり



## ～現在の取り組みと課題、そして更なる試み～

医療相談室 高林 朋史

現在、綿引室長を中心にソーシャルワーカー9名おり、多様な業務の中で病棟・デイケア担当制を基本として7名が相談室に配置されています。国や世間の精神科医療に対する見方も日々変化しており、今後もより質の高いケースワークの提供が、精神科のソーシャルワーカーに求められていると感じています。このような状況の中で、①取り組んでいる事 ②今後の課題 ③更なる試み、という3つの視点から自分なりに考えられる事をお伝えしたいと思います。

### ①取り組んでいる事

入院中の患者様に、心理教育の一環であるリカバリープログラムを提供し、他職種と連携しながら疾病の正しい知識の習得を目指しています。また、各病棟のベットの回転率を意識し長期入院にならないよう、患者様を中心として他職種が関わり地域への退院を支援しています。長期入院患者様の場合、家族の疎遠化や高齢化あるいは家族いない例もあり、地域移行へ繋げる為の時間と労力がかかる状況にあります。そのため、他職種との関わりは必須であります。そのため少なくとも月1回のケア会議を行っています。退院促進に関しては前年度よりさらに力を入れ、5年以上入院している患者様においては、施設見学・体験入所など地域移行するための同行支援や、最新の情報の収集から退院先の太いパイプ作りをしています。

院外においても、各精神科病院のソーシャルワーカーが集まり、お互いのレベル向上を目的とした勉強会や一般科病院の集まる勉強会に参加しています。このように、顔が見える交流を図る事で、お互いに円滑な仕事ができることを確信したいと思います。現在上記を踏まえ仕事に取り組んで結果、多少であるがメリットを実感出来るようになってきました。

### ②今後の課題

まず、退院促進の観点から、ADL の変化や家族の反対、家族の高齢化や制度の壁など、家族や他機関との調整が必要とされます。また、処遇を検討する際、日頃から主治医や看護部とも情報共有に努めていても、意見を統一させるのが困難な場面が多々あります。その為、ソーシャルワーカーとしての視点からケア会議や病棟内、院外勉強会など多くの場面で自分の意見を言うことが出来るように努めています。そして、今以上に他職種との信頼関係を築き上げ、患者様やご家族に対して質の高い支援を円滑に提供することが出来るよう努めていきたいです。

### ③更なる試み

リカバリープログラムを外来で提供可能となるよう、試行錯誤を繰り返しながら発展させ、サービスアップに繋げていきたいです。またケースワークをしていく上で大切とされる概念のひとつに“バイステックの7原則”があります。

これは、1. 個別化 2. 受容 3. 意図的な感情表現 4. 統制された情緒的関与 5. 非審判的態度 6. 利用者の自己決定 7. 秘密保持 から構成され、患者様と信頼関係を築き上げる上で重要とされています。そのため、ケースワーク向上のためにも再度基本に戻り、丁寧に患者様と向き合う必要があることを強く感じています。

以上の点を意識して、ソーシャルワーカーとして必要とされる業務の新たな発見を見出せるように、広い視野で相談援助に取り組んでいきたいと思っています。



## Hobby

「私の意外な趣味」というお題をいただきましたが、なにぶん不精者で趣味と呼べるようなものが見当たらず…。しかも「意外」となること、私にとってはとても難しいお題です。

趣旨から外れるかもしれませんが、昔自転車旅行をしていたことがあります。もう、かれこれ20年以上も前のことですが…。この始まりは高校入学記念に親からマウンテンバイクを買ってもらったことです。私が中学生の頃は学校指定の通称「学チャリ」という農家のおじいさんが乗っているような自転車を乗らされていました。そんな中で、私にとってマウンテンバイクは憧れであり、やっとの思いで手にすることが出来た宝物でした。そのマウンテンバイクを使って何かできないかと考えていたとき、思いついたのが中学校卒業記念に自転車で行こうというものでした。幸いにも賛同してくれる友人が見つかり1泊2日、『犬吠埼』を見に行こうという旅行を実行することになったのです。いざ実行してみると、そこはさすが中学生、1日目の目的地へは昼前に着いてしまい、2日目の目的地である『犬吠埼』には時間が足りずに到着できず終了でした。

その半年後、今度は日光を目的地として2度目の自転車旅行をするようになりました。「いろは坂はさすがにきつかった…」この一言に集約できる旅行でした。そしてまた無計画ぶりが発揮され、中禅寺湖畔のキャンプで寒さに凍え一睡もできずといった具合。失敗ばかりでしたが、これらの出来事は今では楽しい思い出です。

社会人になってみると、忙しさに追われて、この自転車旅行の時のような「のんびりまったりと時間を過ごす」ということを忘れていくように思います。ましてや、人の悩みにじっくりと付き合うことを仕事としている今、自分の心にゆとりを持たせることの重要性を痛感しています。また自転車旅行をして、まったりゆっくりとした自分を取り戻せたらと思います。「自転車旅行」、現在進行形の趣味ではありませんが、またチャレンジしてみたいと思っています。

心理 郡司 幸生

## ～備えあれば嬉しいな～

総務課 大窪 敬美

気付けば東日本大震災から間もなく3年が経とうとしております。その間、業務に忙殺され、震災で困難に立ち向かったあの日々を忘れてはいないでしょうか。おにぎりや味噌汁を分け合い空腹を満たした艱難辛苦の想いを忘れてはいないでしょうか。あれも無い、これも無いという状況でも、危機対応、リスクという点で多くのことを教訓として得たかと思えます。さて、あなたにとって最悪な災害とは何でしょうか？

リスクへの対応で最も重要なのは、危機を未然に防ぐことと危機から素早く復旧することの二つが必要になります。総務課では、現在危機が起きてしまった際の対応力を上げるためにBCP(Business Continuity Planning;事業継続計画)を定めております。BCPとは、大小問わず危機が発生した場合に備えて、予め手元にある資源で対応するための計画のことを指します。近々皆様のお目にかかることができればと思います。

災害が発生した場合、各部署の連携が重要であり、連携を結ぶためには常日頃のコミュニケーションが大きなカギを握ります。また、業務のリスク対応に応用して頂ければと思います。



### フットサル活動

精神科デイケア 作業療法士 宇佐美 隆大

皆さんはフットサルをご存知でしょうか？

フットサルとは、サッカーに良く似たスポーツです。5対5で行い、コートはサッカーの4分の1程度の大きさで、ボールやゴールもサッカーより小さい物を使います。時間は前後半20分で、交替は自由に何回でも行えます。体力、技術、メンタル、そして何よりチームワークが重要なスポーツです。

現在、自主的な活動ですが、当院職員、協力施設である特養 MAO の職員を中心としたチームがあります。このチームの始まりは、遡ること4年前、フットサル大好きな職員の「フットサルやろうぜ！」の一言で結成されました。今年で5年目になります。メンバー数は、マネージャーも含めて13名で、20～30歳代中心の年齢構成となっています。活動内容は、毎週1回の試合や不定期でフットサルの大会に参加しています。結成当初はフットサル経験者が少なく、なかなか試合に勝つことができませんでした。多くの敗戦を経験し、その悔しい思いから、各々メンバーが皆で練習し、努力することで、徐々にフットサルの大会で成績が良くなってきました。今では、“あと一歩で優勝”という段階まで、実力がついてきています。

フットサルを通して、職員の健康増進や交流の場になり、“楽しい”や“嬉しい”、“悔しい”という感情が発散でき、充実した時間を過ごすことができると思います。まだまだ発展途上のチームですが、もし、興味のある方がいれば、サッカー、フットサル未経験者でも構いませんので、是非お声かけ下さい。



\*\*\* 編集後記 \*\*\*

今回は“取り組み”と“学び”をテーマに寄稿して頂きました。質の高い院内報となったと思います。どの取り組みにも各部署間の連携が欠かせないと感じました。年末・年始と飲み会や食事会の多い時期です、皆さんおおいにリアルなコミュニケーションを持ちましょう。

最後に、編集に携わることで沢山の学びや気づきを得ることが出来、このような機会を頂き感謝しております。また、編集委員に新メンバーが加わりました。新しい要素をプラスしながら、より良いものにしていきたいと思えます。

良いお年を。

編集員一同